コミュニケーションキャンプ2014の実践と評価

1年次　久保美由紀　本弓康之　藤原亮治　今野良祐
安達昌宏　熊谷優一　熊倉悠貴　渡會愛梨

本年度も入学式翌日から3泊4日の日程でコミュニケーションキャンプが実施された。この取組みも本年度で15年目を迎える。これまで実践されてきたプログラムが定着してきているが、生徒たちを取り巻く種々の教育環境の変化に対応しうるものになっているのか再度検討する必要性を感じている。本稿では、今年度実践したプログラムの内容における変更点とその背景、プログラム実施における生徒のコミュニケーションスキルの変容からプログラム評価を行うものとする。

キーワード　「コミュニケーションスキル」　「学習導入期指導」　「プログラム評価」

1.　はじめに

コミュニケーションキャンプ（以下「コミキャン」と称する）は総合学科における必履修原則必履修科目「産業社会と人間」の導入として、総合学科での生徒のキャリア形成に必要な土台作りの一つに位置付けられている[1]。

コミキャンは、生徒自身が主体的に、かつ他者と協働しながら円滑な学校生活を送ること、総合学科での学びを理解させ、生徒のキャリア発達の芽生えを促すことを目的に、入学式の翌日から3泊4日の日程で行うアクティビティーを伴う宿泊学習である。

平成11年度から毎年実施している「コミュキャン」は長野県信濃町の黒姫高原で実施され、信州自然大学校および黒姫ライジングサンホテルスタッフと担当学年がこれまでの実践の評価をもとにして、複数回打ち合わせを行い実施している。

これまでのコミュニケーションキャンプに関する実践報告や評価研究[1][2][3]から、共通する成果として、次の2点を挙げることが出来る

① コミュキャンを通じて円滑な人間関係づくりの場を提供できた。
② 様々なアクティビティーを通して達成感を味わうことで自己肯定感・協調性を養うことが出来た。

3泊4日の豊富なプログラムによる宿泊学習を入学直後に経験させることは、生徒間のコミュニケーション網が形成され、円滑な学習生活をスタートさせるという非常に大きな役割を担ってきている。

総合学科が通常の「普通校」や「職業校」と異なる「特異」なカリキュラムを実施している。特に2年次以降のクラス再編や教室移動はこれまで構築されたコミュニティーに負荷をかけることになる。コミュキャンを学校生活の円滑なスタートと総合学科の理念学習と位置づけたプログラムとなっている以上、こうした諸問題とのコミュキャンとの関連性について視野に入れたプログラムの立案を行う必要があると考えた。

コミュキャンも今回で15回目になる。これまで積み上げられてきた実践をベースにしながらも、さらに充実した「コミュキャン」になるよう、前述した課題・視点を盛り込んでプログラムの改良・改変を試みた。

2.　本年度の目標

2014年度のプログラムの立案に際して、近年の本校生徒の様子についてこれまで述べられてきている様子と大きな変容は見られないことを学年担任で確認した。

① 表面的な他者との関わりは上手いが、必要が迫られたときの協力依頼および自己開示ができない。

② 身体的・精神的ストレスに対する耐性が弱く逃避型適応を選択しがちである。

③ 自分の興味関心から外にある世界について触れようとしない。

こうした状況に応じて立案・実施されたこれまでのプログラムであるが、プログラム内容の大きな変更はこれまであまり実施されていない。このキャンプをきっかけにして大きな変化を見せる生徒、スムーズな学校生活を送ることが可能となった生徒が多く存在し、一定の教育的効果を確認できたことから、変更の必要性について検討が十分議論されてこなかったのではないかと考える。類似したプログラムであったとしても、対象となる生徒の特性が変化していけば、表出される現象も異なる。担任団でそれらをふまえ協議した結果、「強制的に作り上げられた空間の中でできた仲間関係が、次年度のクラス替え時に大きなストレスとなるのではないか」という疑問を抱いた。理由として過去３年間の保健室利用者数の傾向が６．９月の非常に多いことが分かっている。その理由を利用者や養護教員に聞いたところ「１年次のクラスの居心地がよく、新しいクラスになじめない」といったことを挙げる生徒が多く、人間関係の再構築に非常に大きなストレスを抱えていることが分かっている。こうした問題意識を担任教諭と信州自然学校スタッフとが共有したうえで今回のキャンプの目的を以下のように設定した。

① 新しく知り合った１６０名の仲間との友情を培う。

ある特定の集団に偏った関係作りに陥らないように、プログラム内容ごとに集団の質・量を常に再編成し、少しでも多くの生徒との触れ合いの中で、他者を知り、自己を知るとともに互いに尊重・強調して生活する基盤をつくる。

② 総合学科における学習姿勢について学ぶ。

「自ら考え、自ら学び、自ら行動する」という総合学科で学ぶ基本姿勢について、体験型学習および生活を通じて理解する。

③ 黒姫高原の自然に触れ、人間と自然環境が調和して生活することを学ぶ

黒姫高原での様々なアクティビティーを通じて、自然の厳しさ、美しさを体験し、人と環境（自分と他なる者）とが調和して生きることの大切さについて考える。

３． プログラム計画

表１は、２０１４年度のキャンプの主活動を時系列で示したものである（詳細な日程は付表１）。目標を実現するためのプログラムとして、これまでから大きく変更した内容については述べる。

第1日目

時間	プログラム名	内容	備考
午前	移動・自己紹介		HR担任が担当
午後	アイスブレーク	男女混合：10班	S自然学校のインストラクターが指導
夜	昆虫食 講義①「自分史」 講義②「自分史」	講義の前段として実施。 副校長先生 ナウマン像記念博物館学芸員	キャリアデザインの第1回講演

第2日目

時間	プログラム名	内容	備考
午前	プロジェクト・アドベンチャー	男女混合：10班	S自然学校のインストラクターが指導 教員は生徒の行動観察
午後			
夜	講義③「総合学科における学校生活」	総合学科について 総合学科の学習規定	HR担任が担当
	ナイトハイク	クラス別 宿舎周辺の山道を、各クラス1列で歩いていく 歩行中は一切会話をせずに歩く	HR担任が担当

第3日目

時間	プログラム名	内容	備考
午前	ロング・ハイク	男子：7班 30km程度	S自然学校のインストラクターが指導 補助必要生徒に教員配置
午後		女子：6班 20km程度	
夜	R-CAP JS の実施		HR進路担当教員が実施

第4日目

時間	プログラム名	内容	備考
午前	クラス対抗ミッション（校歌合戦）	・クラス対抗で実施 ・順位に応じて、昼食のカレーに入れる肉の量が変化	HR担任が担当
	カレー作り	各クラスを男女混合4班に編成 班ごとに食事を行う	HR担任が担当

表１ コミュニケーション・キャンプの主活動

3.1 班編成

前述した「仲間作り」における次年度以降の困難生徒の出現について担任で協議した。全域から募集を行う本校については、出身校が同じ生徒の数が他の学校と比較しても非常に少ないことが特徴としてあげられる。そして入学式翌日という非常に緊張状態にある中で、特定のかぎられた仲間と体験を伴う学習を終始

進めていくことは、入学式以後の友人関係の構築に大きく貢献することは間違いない。しかし一方で与えらではその後訪れる仲間作りの再編にうまく活かされない、逆にコミュニティーの強制的環境による強化が、主体的コミュニティー形成を難しくする可能性もあるのではないかという考えを共有した。そこで今回のキャンプでは、プログラム毎に班編成を変更し、常に新しい仲間と交流を行う環境を追加設定することとした。

3.2　ロングハイク

子どもの体力・身体的資質に関する問題は本校においても非常に悩ましい問題の一つである。これまで長く続けてきたマウンテンバイクであるが、近年は自転車に乗れない生徒やその操作性に問題のある生徒が少なくない数見られるようになってきた。起伏に富んだコース、雪解け水でぬれた路面は生徒によっては難度が高い。加えて最近の黒姫の幹線道路は大型ダンプの往来が激しく、集団で隊列を走り抜くには非常に危険を伴うものとなっていた。時間についても初めてマウンテンバイクに乗る生徒のための安全講習に１時間３０分割くなど諸課題があり、今回のキャンプではマウンテンバイクで身体的、精神的負荷をかけながらも生徒が安全に、自由にコミュニケーションをとれる環境を作り出すことは困難と判断し、これらを可能にするプログラムとしてロングハイクへの変更を判断した。キャンプ自体のプログラムは男女共修で行うことが多い。これまでもマウンテンバイクについては男女共修で行われることが多かった。この場合、集団形成において性別差による身体的ストレスが非常に大きな要因となり、他の個人内差に目を向ける機会を奪いかねない。今回のロングハイクについては、身体的資質が大きく異なる男女を別班とし、性別という固定された同質的集団のなかで起こる事柄に対して、各班および個人でしっかり向き合えるよう配慮した。またルートについても、新しい班がそれぞれでしっかり活動するためにルートが重ならないように指導員の方にコース設定していただいた。

3.3　昆虫食

１日目の夕食のバイキングに昆虫食（イナゴの甘露煮・蜂の子）を提供した。日本に古くからある文化・伝統に日常の生活のなかで触れる機会の提供と、己のもつ先入観（固有の知識）と現実とのギャップが少なからず存在することを認識するためのプログラムとして、またその後の博物館館長の講話への興味・関心を高めるものとして実施した。

（写真）昆虫食

3.4　クラス対抗ミッション

生徒のコミュニケーション能力を高めること、帰属意識を高めることを目的に行った。本校の特徴として２年次以降各々異なった時間割で学校生活を送ることから、クラスでの活動が非常に少なくなる。新しい仲間の再編成また、教室移動という学習環境のめまぐるしい変化に柔軟にかつ主体的に対応できるためには「自分の想いをきちんと声にして届ける力」「めまぐるしく変わる環境の中で自己を認識・理解させる発信力」が必要であると考えた。こうした資質を向上させていくための導入活動として、各々異なる目標を認め合い、高めあえる学校に誇りを持つための基盤作りとして「校歌合戦」を行った。

4.　評価の内容

生徒のコミュニケーションスキルの評価は以下の３点で行った。

① ENDCOREs 質問紙調査（付表２）
② インストラクターによるコミュニケーションスキルチェック（付表３）
③ 振り返りアンケート（付表４）

4.1　ENDCOREs 質問紙調査

生徒のコミュニケーション力の変化を数値化でき

る手法として、藤本・大坊らが 2007 年に開発した ENDCOREs をキャンプ実施前後に測定することとした。ENDCOREs は、基本コミュニケーション・スキルの測定する尺度として、藤本・大坊ら[4]が 2007 年に開発した ENDCOREs を用いた。ENDCOREs は、表出系（ENcode）・反応系（Decode）・管理系ですべての基礎となる自己統制（COntrol）、同じく管理系ですべての上位に位置する関係調整（REgulate）の頭字語と scale の頭文語を組み合わせたものである。ENDCOREs は、基本スキルとして、自分の感情や行動をうまくコントロールする「自己統制」、自分の考えや気持ちをうまく表現する「表現力」、相手の伝えたい気持ちを正しく読み取る「読解力」スキルと、対人スキルとして、自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する「自己主張」、相手を尊重して相手の意見や立場を理解する「他者受容」、周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整する「関係調整」の６つの下位尺度から構成されている。[5]

尺度について、藤本らは７段階を用いているが、実施が行き帰りバスの移動中に行うことから、より簡易に実施できるようにするため５段階とした。また本校の生徒に、質問項目が正確に理解されるよう文言の修正を行った。

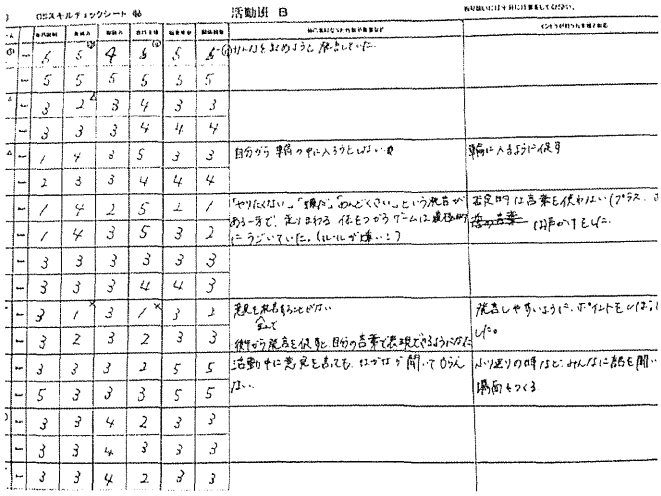
統計処理について、ENDCOREs 質問紙調査は EXCEL2010 を用いて測定時期を水準とした対応のある T 検定を行った。欠損値のある生徒を除いた 153 名、キャンプ実施前調査における得点上位群 40 名と下位群 40 名でそれぞれ行った。

4.2　インストラクターによる評価

生徒の各日のコミニュケーション・スキルを客観的に観るため、主活動を担当するインストラクターのみなさんにも生徒のスキルチェックをお願いした。ENDCOREs の各因子について事前に説明資料を配布し、この６因子について、午前中と午後の２回、活動終了後に担当生徒の様子を 5 段階で評価してもらい、あわせて生徒の様子やインストラクターの行った支援についても記述してもらった（写真１）（付表３）。

4.3　日々の活動振り返りアンケートの実施

1 日目~3 日目の夜間講義終了後の自由時間にその日の自分について振り返るアンケートを実施した（付表 4）。統計処理については SPSS11.0 を用いて測定時期を水準とした１要因の分散分析を行った。



（写真）インストラクターによる評価

5.　結果

5.1　コミュケーションスキル主観的評価の変化

5.1.1　２１期生全体の変化

各下位尺度および全体の得点について、プログラム実施前後（pre, post）の被験者全員の変化について、T 検定を行った。表２からすべての項目で有意な差がみられなかった。

5.1.2　実施前総得点の上位群について

次に pre における総合得点を上位群（n=40）と下位群（n=40）に分け各群の実施前後の総得点および各尺度得点の変化について対応のある T 検定を行った。表２から上位群においては、キャンプ実施前後で「総得点」$p<.05$ および「自己主張」$p<.05$,「関係調整」$p<.05$ について有意な差が認められた。得点の変化についてみると、有意差が認められた全ての項目においてキャンプ実施後にコミニュケーション・スキル評価が低下した。

5.1.3　実施前得点の下位群について

下位群においては、キャンプ実施前後で「総得点」$p<.01$ および「表現力」$p<.05$,「読解力」$p<.05$「他者受容」$p<.01$,「関係調整」$p<.01$ について有意な差が認められた。得点の変化についてみると、有意差が認められた全ての項目においてキャンプ実施後にコミニュケーション・スキル評価が向上した。

5.2 振り返りアンケートについて

表3が示す通り質問項目のすべてにおいて有意な変化が認められた。Bonferroni 法を用いた多重比較の結果（表 4）から述べると、質問項目１「課題が解決できたか」,項目２「成し遂げた満足感を味わえたか」でも初日よりも２日目、３日目が高くなった。２日目と３日目では有意な差は見られなかった。

項目３「班は友人の意見に耳を傾けたか」，項目４「班は積極的に意見をだしあえたか」では初日と２日目，３日目の間には有意な差はなかったが,2 日目よりも３日目の方が低かった。

項目５「友人に対しサポート，アドバイスできたか」と項目６「ほめたり、励ましたりしたか」，項目９「主体的に取り組めたか」については初日よりも２日目の方が高かったが、その他については差がみらえなかった。

質問項目７「班が一つになったか」質問項目８「みんなに支えられているように感じたか」で１日目から２日目にかけては高くなったが、２日目から３日目にかけては低下した。

表２　キャンプ実施前後のコミュニケーション力評価および下位尺度得点平均の比較

		総得点	自己統制	表現力	読解力	自己主張	他者受容	関係調整
全体 =153	pre	86.61	15.20	13.09	14.26	13.36	14.82	15.01
	pos	87.16	15.11	13.32	14.42	13.27	14.95	15.22
	両側確率	0.555	0.646	0.258	0.421	0.648	0.453	0.283

		総得点	自己統制	表現力	読解力	自己主張	他者受容	関係調整
上位群 n=40	pre	101.25	17.20	15.54	16.71	16.00	17.05	17.39
	pos	98.34	16.88	15.39	16.22	15.34	16.56	16.78
	両側確率	0.046	0.319	0.410	0.158	0.037	0.090	0.033
		*				*		*

		総得点	自己統制	表現力	読解力	自己主張	他者受容	関係調整
下位群 n=40	pre	72.45	13.60	10.45	11.70	10.65	12.48	12.55
	pos	76.95	13.55	11.38	12.53	11.30	13.53	13.50
	両側確率	0.004	0.900	0.024	0.011	0.065	0.001	0.004
		**		*	*		**	**

** $p < 0.01$　* $p < 0.05$

表３　ふりかえりアンケート分散分析

	1日目		2日目		3日目		分散分析
質問番号	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F
1	4.20	0.72	4.63	0.58	4.58	0.67	24.42 **
2	4.56	0.59	4.76	0.53	4.72	0.57	7.20 **
3	4.61	0.55	4.67	0.58	4.46	0.76	6.56 **
4	4.26	0.78	4.37	0.79	4.14	0.89	4.52 *
5	4.18	0.76	4.37	0.80	4.35	0.83	3.91 *
6	4.27	0.74	4.50	0.68	4.35	0.84	6.03 **
7	4.47	0.63	4.76	0.59	4.40	0.86	15.00 **
8	4.40	0.67	4.64	0.60	4.37	0.87	7.98 **
9	4.35	0.72	4.56	0.65	4.48	0.74	5.62 **

1　あなたの班は、今日課題にしたことを解決することができましたか
2　あなたは、班のみんなで成し遂げたという満足感を味わうことができましたか。
3　あなたの班は、友達の意見に耳を傾けて聞くことができましたか。
4　あなたの班は、課題解決に向けて積極的に意見をだしあうことができましたか。
5　あなたの班は、班の友達を補助したり、助言したりして助けることができましたか。
6　あなたの班は友達をほめたり、励ましたりしましたか。
7　あなたは、班がひとつになったように感じましたか。
8　あなたは、班のみんなに支えられているように感じましたか。
9　あなたは、今日取り組んだ活動を楽しむこと（充実・味わう）ができましたか。

表４　ふりかえりアンケート多重比較

		質問項目1			質問項目2			質問項目3		
		平均値の差	標準誤差	有意確率	平均値の差	標準誤差	有意確率	平均値の差	標準誤差	有意確率
1日目	2日目	-.425*	.066	.000 **	-.197*	.050	.000 **	-.059	.047	.652
	3日目	-.373*	.068	.000 **	-.164*	.059	.017 *	.150	.066	.073
2日目	1日目	.425*	.066	.000 **	.197*	.050	.000 **	.059	.047	.652
	3日目	.052	.065	1.000	.033	.058	1.000	.209*	.063	.004 **
3日目	1日目	.373*	.068	.000 **	.164*	.059	.017 *	-.150	.066	.073
	2日目	-.052	.065	1.000	-.033	.058	1.000	-.209*	.063	.004 **

		質問項目4			質問項目5			質問項目6		
		平均値の差	標準誤差	有意確率	平均値の差	標準誤差	有意確率	平均値の差	標準誤差	有意確率
1日目	2日目	-.111	.080	.502	-.190*	.070	.024 *	-.229*	.058	.000 **
	3日目	.124	.083	.412	-.163	.072	.075	-.085	.075	.783
2日目	1日目	.111	.080	.502	.190*	.070	.024 *	.229*	.058	.000 **
	3日目	.235*	.071	.003 **	.026	.078	1.000	.144	.066	.092
3日目	1日目	-.124	.083	.412	.163	.072	.075	.085	.075	.783
	2日目	-.235*	.071	.003 **	-.026	.078	1.000	-.144	.066	.092

		質問項目7			質問項目8			質問項目9		
		平均値の差	標準誤差	有意確率	平均値の差	標準誤差	有意確率	平均値の差	標準誤差	有意確率
1日目	2日目	-.288*	.060	.000 **	-.242*	.060	.000 **	-.216*	.059	.001 **
	3日目	.072	.081	1.000	.033	.085	1.000	-.131	.073	.231
2日目	1日目	.288*	.060	.000 **	.242*	.060	.000 **	.216*	.059	.001 **
	3日目	.359*	.066	.000 **	.275*	.078	.002 **	.085	.061	.507
3日目	1日目	-.072	.081	1.000	-.033	.085	1.000	.131	.073	.231
	2日目	-.359*	.066	.000 **	-.275*	.078	.002 **	-.085	.061	.507

6.　考察および総括

6.1　生徒のコミュニケーション・スキル評価の変容

生徒全体でみると、コミュニケーションスキル評価について向上していると生徒が評価するまでには至らなかった。変容の様子について、上位群・下位群で見ると、上位群はスキル評価を実施前よりも低く捉える結果を見ることが出来た。尺度別に見てみると上位群は「自己主張」「関係調整」について評価が有意に低下していた。インストラクター評価から上位群生徒を個々に見ていくと各班でリーダー的存在になっている生徒が少なく、また関係構築にサポートが必要な生徒も少ないことがわかった。インストラクター評価を尺度別に見ると「他者受容」が高い反面「表現する力」が足りない生徒が多く、「自分」が気づいた事について、周囲に「適切に表現・発信」できていないことで班のコミュニティーの醸成(関係調整)にうまく寄与できていない事に気づけた結果、キャンプ実施後の自己評価評価を厳しく評価したと考えられる。

一方で下位群の生徒については、実施前よりもスキルを高く評価した。尺度別にみると「表現力」「読解力」「他者受容」「関係調整」で有意に高い数字を確認できた。インストラクター評価を個々に見てみると、下位群には２通りの生徒がいることがわかった。１つは「コミュニケーションはしっかりとれるが自分にたいして自信がない」生徒と「コミュニティー参画にサポートが必要」な生徒である。前述の生徒については「リーダー的存在」として活動の活性化に寄与する生徒も多かった。活動を通じた成功体験が自分の中の高校生活や仲間づくりへの不安を払しょくし、自尊感情を高めることが出来たと考える。後者の生徒について活動初期は他者とうまく関われず、全体の動きを後追いする様子が多く見られた。しかしアイスブレークやプロジェクトアドベンチャーなど一人一人が主体的な関わりをしなければ達成できない課題が多くある活動を通じて次第に他者との歩調を合わせ、コミュニケーションをとる時間・距離感が改善されていったという評価が報告された。キャンプを通じて、与えられた課題を理解し、自身の意見を積極的に発信するまでには至らないが、他者の意見を受け止め、それに協力し解決に寄与できるようになったと認識し、「表現力」「読解力」「他者受容」「関係調整」の因子得点が高まったと考えられる。

6.2　実施されたプログラムについての評価

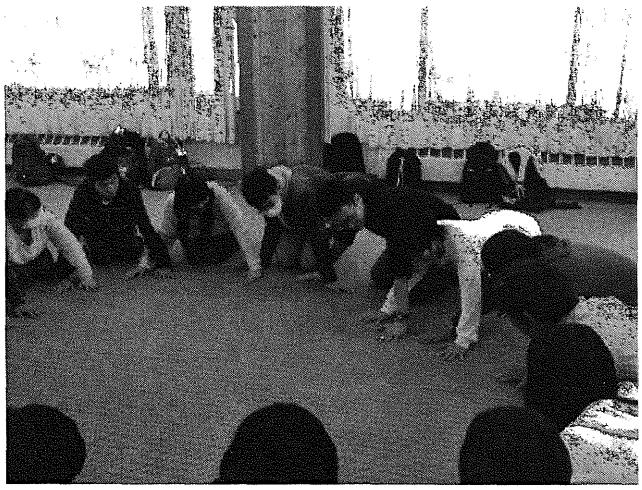
6.2.1　1日目のプログラム

学校を出発し、予定どおり黒姫に到着した。バスの中では例年に比べかなり早い段階から活発な会話が交わされ担当教員の方が驚く状況であった。しかし日中の主活動であるアイスブレークになると、自分の意見・考えを主体的に発信する姿は前半および中盤では影をひそめた。観察した教員の報告によると学習や失敗に対する不安や緊張がその場を支配する中、心が開かれるまでの時間に大きな差があった。グループの質だけでなく、打開を試みるインストラクターのスキルが大きく影響することが確認できた。

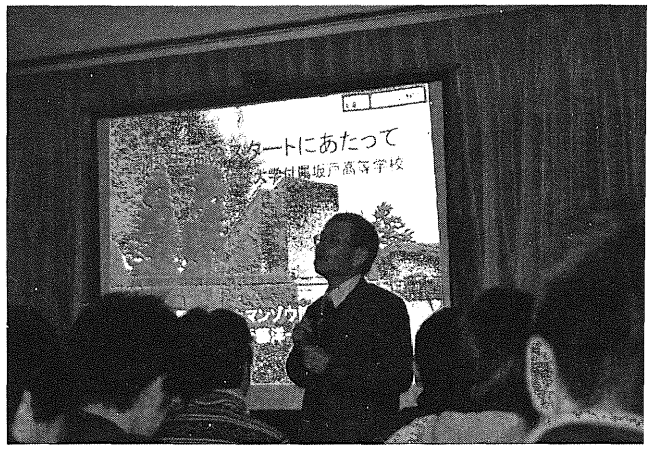
夜は、総合学科らしい「普通・あたりまえからの脱却」として用意した「昆虫食」のインパクトは絶大であり、食事の中で様々な反応を生徒が示していた。当初は嫌がっていた生徒たちも次第に「おいしい」と食べ始め、自発的におかわりをする生徒も見受けられた。「意外と大丈夫」「見た目から判断できない」など、これまで抱いていた先入観を覆す反応が多くみられた。

夜の講義は「自分史」について副校長先生と地元の野尻湖ナウマンゾウ博物館学芸員の方にお話しいただいた。1年生の段階から次年度以降の時間割作成など自分の近い未来を計画的に創造していく新入生に対して、近しい大人が自分史を語ることで、自己の未来の姿をイメージする力や「他者を知る力」を育むことを目的としたが、初日の緊張感か熱心に耳を傾け、相づちを打つなど反応を示す生徒も多くみられた。

ふりかえりアンケートの結果（表3）を見ると、初日ということもあり、主張や声掛けなど発信・表現は他項目と比べ低めではあるもののすべてが4.0を上回っていることから本人たちが主体的にかかわれた1日目であったといえる。



（写真）アイスブレークの様子

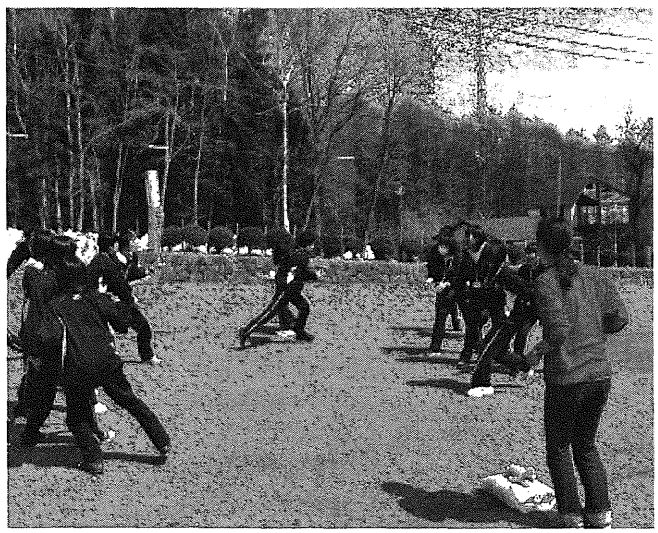


（写真）博物館学芸員による講義

6.2.2　2日目のプログラム

2日目のプロジェクトアドベンチャーは年によっては半日で設定する年度もあるが、今回は1日で行った。明日に班を再編したときに享受できる学習環境をより良質にするためにも、少しでも高度なコミュニケーションに近づく必要があったからである。1日じっくりとプログラムを行ったことで全ての班が高度なアクティビティーにチャレンジすることができた。1日目とは交わす言葉の内容が深まり、意見をだせる生徒の数や、それに反応する速度が改善されていく様子が確認できた。

その日の振り返り（表4）を見ると、質問項目1･2･5･6･7･8･9が有意に高くなっていることから、それぞれが行動に対してプラスの反応を友人に示し、良い雰囲気の中で課題を達成することができたと考える。

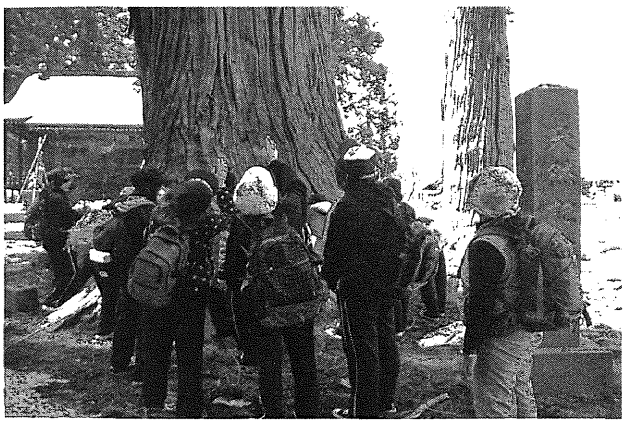


（写真）　プロジェクト・アドベンチャーの様子

6.2.3　3日目のプログラム

今年度大きく変更したロングハイクが主活動であった課題解決型のアクティビティーとは、質の異なる負荷の

なかで各人がそれぞれどのように他者と関わるのかを自他で認識しあうことを目的とした。加えて 1・2 日目の反復として、班も再編しこれまで学習したコミュニケーション・スキルの再試行、定着化を図る機会を設けた。受験勉強を終えたばかりの中学生には男子 30km・女子 20km の歩行は簡単な距離ではない。前日までのにコミュニケーションをとらざる負えない環境設定もなく、他者との関わりを難しく感じる生徒もいたが、そうした生徒をしっかりと気遣い、言葉をかけたり歩行スピードの調整を進言する生徒も現れるなど、再編された班の中であっても 1 日目とは明らかに違う高度な関わりは随所に見られた。



（写真）ロングハイクの様子

振り返り（表 4）を見ると、「意見の交換」「一体感」が 2 日目より低く評価された。これは 2 日目の環境設定とは大きく異なるので、関わりについて量的な減少を感じたこと、また連帯感やつながりについては精神的・肉体的ストレスが増加し、己と向き合う時間が多かったこと、その中でネガティブな感情と葛藤していた事を低値と置き換えて評価したためであろう。しかし、「満足感・達成感」は初日よりも高く、2 日目と同程度の高い値を評価していることから、充実したプログラムとして認識されていると考える。そして重要なことはこれまでの 2 日間の活動を活かす環境を与えることが出来たことであり、2 年次に経験するクラスの再編、教室移動による学習集団の流動化を疑似経験できた事であろう。

6･2･3　全体から

これらのことから、キャンプを通じて、生徒ひとりひとりが自己のスキルについて、しっかりと向き合うことができたキャンプとなったことがわかった。ある限定された人間・空間の中で構築されるスキルや成功体験だけでなく、学年という大きな枠の中で様々な生徒が生活していることを互いが認識し、認め合い協調することの大切さ、主体的にかかわることの大変さや、そこから広がる関係性を各々がしっかりと感じ取れるキャンプになったのではないかと考える。

これまでは活動する場合の班は活動班とクラス班が多く、3 日間同じ活動班で、また同じ生活班などコミュニティーが変化しない環境で過ごす場合が多かった。そのため最初こそ緊張感を持って互いと接するが、終盤および学校生活スタート時は過解放状態に陥ることも多かった。

今回のプログラムでは活動班を固定せず、活動プログラムごとにグループを別編成して行った。またキャンプ終盤にロングハイクを導入したことでより身体的負荷がかけられた状態で，新しい仲間と 1 からコミュニケーションをとらなければならないなど、非常に求められるスキルレベルが高くなった。これにより、コミュニケーションキャンプの初日から終盤にかけて常にコミュニケーション環境に負荷がかかる状態を維持できた。結果としてスキル評価をする際、特定のグループ内で短期間に形成されたコミュニティーに対する満足感や成熟感に影響されることなく活動を冷静に受け止めることが出来たと考える。

引用・参考文献

1．筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要. 第 45 集(2007)「コミュニケーション・キャンプ 2007」実践報告

2．筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要. 第 47 集(2009)「平成 21 年コミュニケーション・キャンプ」実践報告

3．建元喜寿(2008).「入学直後の高校 1 年生に対する野外教育プログラムの評価」. 国立青少年教育振興機構研究紀要. 第 8 号

4．藤本学，大坊郁夫（2007）コミュニケーションスキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み，パーソナリティー研究，第 15 巻，347-361

5．河内浩美，池田かよ子（2014）看護学生における SOC とコミュニケーション・スキルの実態，新潟青陵学会誌，第 7 巻第 1 号，57-58

付表１　　コミュニケーションキャンプ日程

日にち 時間	４月１０日（木）	４月１１日（金）	４月１２日（土）	４月１３日（日）
６：００		起床	起床	起床
７：００		朝食	朝食	朝食
８：００	集合 学校出発	PA（班別） １班 16 名×10 班 （会場） 町民体育館 スキー場休憩所	ハイキング 男子３０ｋｍ ７班 女子２０ｋｍ ６班	荷物移動 部屋点検 校歌合戦 カレー作り
９：００				
１０：００				
１１：００	黒姫到着 昼食 開校式	（昼食）	（昼食）	昼食 更衣
１２：００	アイスブレイク開始			土産購入 集合写真 閉校式 黒姫出発
１３：００				
１４：００				
１５：００				
１６：００	アイスブレイク終了 係打ち合わせ	PA 終了 入浴	ハイキング終了 入浴	学校到着 解散
１７：００	入浴	夕食	夕食	
１８：００	夕食 バイキング&昆虫食	講義③ （HR 担任） ナイトハイク	JS	
１９：００	講義① （小林副校長）			
２０	講義② （博物館近藤）			
２１		点呼 消灯	点呼 消灯	
２２	点呼 消灯			

付表２

コミュニケーションキャンプ・アンケート

1年　　組　　番　氏名（　　）

コミュニケーションキャンプを終えた今の自分について、以下の質問に5段階で答えなさい。

5（できる）・4（どちらかというとできる）・3（どちらともいえない）・2（どちらかというとできない）・1（できない）

1．	「おもわず～してしまう・したいと思う」という行動や気持ちをうまく抑えることができる	5・4・3・2・1
2．	周りの期待や思いに応じた態度をとることができる。	5・4・3・2・1
3．	相手の考えていることを話から正しく読み取ることができる。	5・4・3・2・1
4．	人と話すとき、会話のペースを自分が握って話を進めることができる。	5・4・3・2・1
5．	相手の意見や立場を自分のことのように捉えること、考えることができる。	5・4・3・2・1
6．	人間関係を第一に考えて行動することができる。	5・4・3・2・1
7．	自分の感情をうまくコントロールすることができる。	5・4・3・2・1
8．	自分の考えを相手に**言葉**でうまく表現することができる。	5・4・3・2・1
9．	相手の気持ちをしぐさ（行動）から正しく読みとることができる。	5・4・3・2・1
10．	周りとは関係なく自分の意見や立場を明らかにすることができる。	5・4・3・2・1
11．	友好的な態度で相手に接することができる。（～させる×、ともに～しよう○）	5・4・3・2・1
12．	人間関係を良好な状態に維持するように心がけることができる。	5・4・3・2・1
13．	善悪の判断、モラルにもとづいて正しい行動を選択することができる。	5・4・3・2・1
14．	自分の気持ちを相手に**しぐさ（行動）**でうまく表現することができる。	5・4・3・2・1
15．	相手の気持ちを表情から正しく読みとることができる。	5・4・3・2・1
16．	納得してもらうために相手に柔軟に対応して話を進めるすすめることができる	5・4・3・2・1
17．	相手の意見をできる限り受け入れることができる。	5・4・3・2・1
18．	意見が対立している場に居合わせたときにそれぞれに適切に対応することができる	5・4・3・2・1
19．	自分の気持ちを相手に顔の**表情を用いて**うまく表現することができる。	5・4・3・2・1
20．	相手の感情や心の状態を敏感に感じ取ることができる	5・4・3・2・1
21．	自分の言いたいことををわかりやすく道筋を立てて説明する	5・4・3・2・1
22．	相手の意見や立場を尊重することができる。	5・4・3・2・1
23．	感情的にぶつかっている場にいあわせた時、双方に適切に対処することができる。	5・4・3・2・1
24．	自分の感情や心の状態を相手に正しく察知してもらうことができる	5・4・3・2・1

4／　（　）　CSスキルチェックシート ㊙　活動班 A　取り扱いには十分に注意をしてく

		氏	名	キャンプネーム		自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容	関係調整	特に気になった行動や発言など	イントラが行った支援と反応
1	A				Start								
					finish								
1	A				Start								
					finish								
1	A				Start								
					finish								
1	A				Start								
					finish								
1	A				Start								
					finish								
1	A				Start								
					finish								
1	A				Start								
					finish								
1	A				Start								
					finish								
1	A				Start								
					finish								
1	A				Start								
					finish								

付表３

付表４

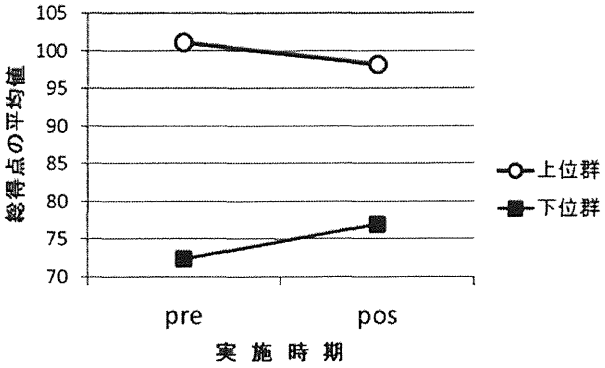
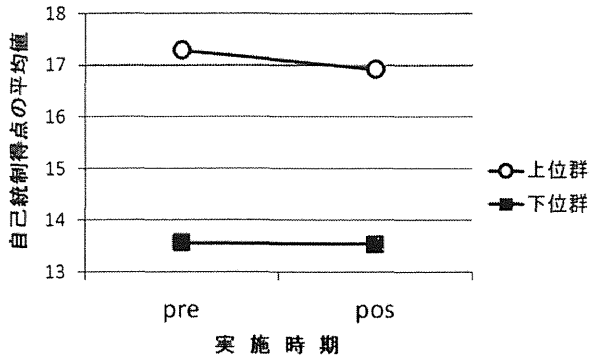
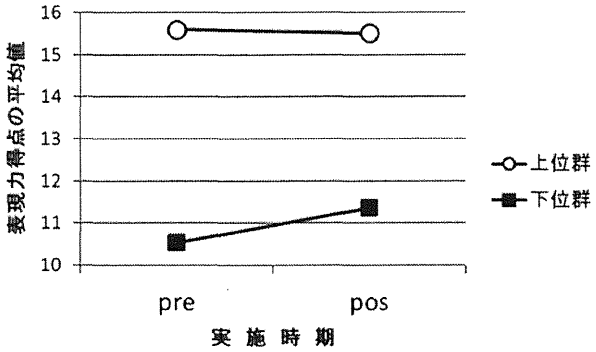
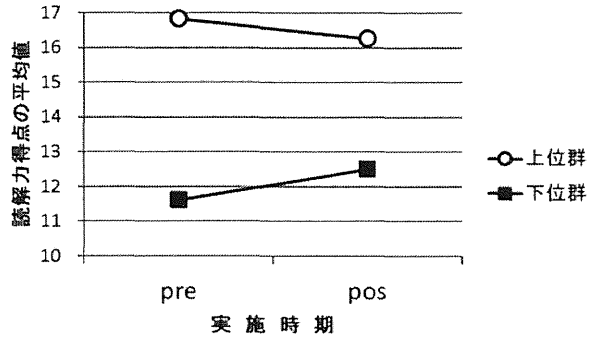
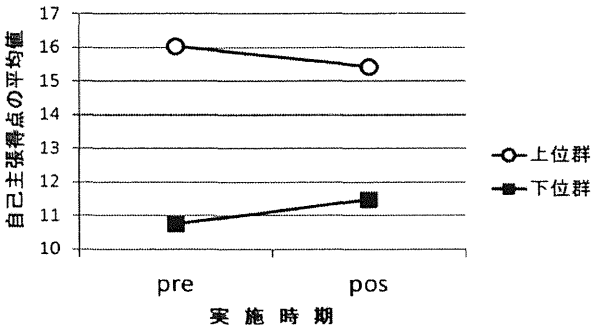
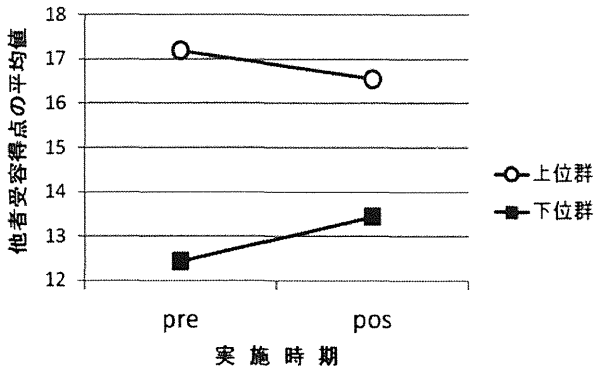
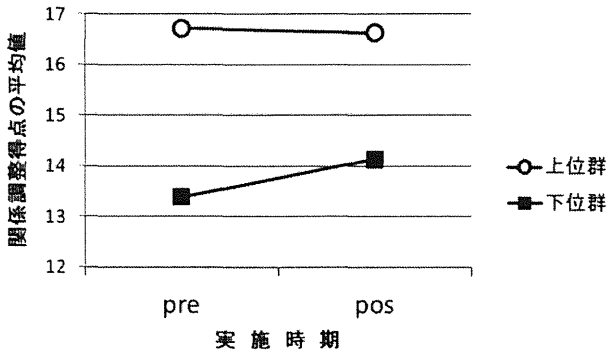
コミュニケーションキャンプについてのアンケート

＿＿＿月＿＿＿日（　　）　第＿＿＿日目　　活動班＿＿＿＿＿班

＿1＿年＿＿＿組＿＿＿番　　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

本日のコミュキャンの活動について質問します。あなた、またはあなたの班はどうでしたか？５段階の適する数字に〇を付けてください。

５（はい）・４（どちらかというとはい）・３（どちらともいえない）・２（どちらかというといいえ）・１（いいえ）

Ⅱ－１	あなたの班は、今日課題にしたことを解決することができましたか	５・４・３・２・１
Ⅱ－２	あなたは、班のみんなで成し遂げたという満足感を味わうことができましたか。	５・４・３・２・１
Ⅱ－３	あなたの班は、友達の意見に耳を傾けて聞くことができましたか。	５・４・３・２・１
Ⅱ－４	あなたの班は、課題解決に向けて積極的に意見をだしあうことができましたか。	５・４・３・２・１
Ⅱ－５	あなたの班は、班の友達を補助したり、助言したりして助けることができましたか。	５・４・３・２・１
Ⅱ－６	あなたの班は友達をほめたり、励ましたりしましたか。	５・４・３・２・１
Ⅱ－７	あなたは、班がひとつになったように感じましたか。	５・４・３・２・１
Ⅱ－８	あなたは、班のみんなに支えられているように感じましたか。	５・４・３・２・１
Ⅱ－９	あなたは、今日取り組んだ活動を楽しむこと（充実・味わう）ができましたか。	５・４・３・２・１

付図　生徒によるコミュニケーション・スキルの上位群・下位群別結果